「もっと生きたい！」を読んで

宮本　玲

みなさんは移植という治療法について、考えた事はありますか。臓器移植は、悪くなった自分の臓器を取り出し、ドナーと言う臓器提供者から健康な臓器をもらうという治療法です。人の体の一部をやりとりするなんて、私には考えられない事でした。まず、自分に合うドナーを見つけることが大変です。また、手術が成功しても、拒否反応が出たり、食べる物や動く範囲が制限されます。毎日当たり前にやっていた事が出来なくなるのは、身体的だけでなく、精神的にも辛いだろうなと思いました。

この本の美紗都さんは、生まれつき左冠動脈に異常があり、小学校五年生のときに、左冠動脈右バルサルバ洞起始症という珍しい病気と診断されました。スポーツ中に心肺停止し、なんとか命は助かりましたが、その後いろんな手術を受けても症状は悪くなるばかり

でした。

美紗都さんのお母さんはずっと前に病気で亡くなり、お姉さんも生まれつき心臓に問題がありました。家事や看病、仕事と、すべて一人で精一杯やるお父さんの様子に家族の事を一番に考え、優しさにあふれる人だと感動しました。それでも、お父さんがいつも子供たちに申し訳ない気持ちでいっぱいというのを読んで、私は不思議に思いました。きっと、父親として子供たちの辛さを代わってあげたいという気持ちが強かったと思います。

心臓移植しか助かる方法がないと分かり、落ち込んでいた美紗都さんは、お父さんの前向きな気持ちに励まされました。悩んでいたお父さんも、娘が病気に立ち向かおうとする姿を見て、元気づけられました。こういう風にお互いに助け合う二人に、私はとても心が打たれました。美紗都さんだけではなく、お父さんも手術や移植などの命に関わる決断をしないといけなくて精神的に二人とも大変だ

たと思います。でも、そばにいて支え合える関係は、困難を乗り越えていくために大切なことだと感じました。

私は、病気で苦しむ人の話をいくつか読んだことがありますが、病気のために周りの人に冷たい目で見られたり、友達や家族に迷惑をかけて辛い思いをした事がよく書いてありました。それを見ている周りの人も、助けることが出来なくて悔しいと思います。本人だけでなく、いろんな人に影響を与えるのだから、病気にかかることは恐ろしい事だなと思いながら読みました。

心臓移植のドナーがや、と見つかっても、手術のためドイツに行くのに多額の費用がかかるとかかったとき、お父さんは諦めかけていました。行ったこともない国で、言葉が通じないのに、手術を受けるなんて不安しかなかったでしょう。

でも、この費用を募金活動などをして応援してくれたクラスメイトがいました。美紗都

さんは学校にあまり行けなかったのに、そうやって支えてくれる友達がいて、どれほど勇気づけられたことでしょう。皆はまだ子供だったのに、募金活動のために知らない人に声をかけるなんて、すごい勇気だなと思いました。私も補習校祭りやジャパンデーなどで出店の手伝いをした時、なかなかお客さんに声をかけることができませんでした。でも、美紗都さんのクラスメイトは、何時間も何日も外で大きな声を出し続けたのです。美紗都さんが一日でも早く治療を受けられるように、皆の強い思いが一つになって出来たことだと思います。

そのおかげで、ドイツに行けた美紗都さんとお父さんにとって、言葉が違う国でも支えてくれた病院のスタッフや、遠い日本で応援してくれた姉や友達が心の助けになったと思います。無事に移植が終わり、回復した美紗都さんは、やっと家族がいる日本へ帰れました。たくさんの人に応援してもらって感謝の

気持ちでいっぱいの美紗都さんは、この病気を通してたくさんの宝物を手にした気がします。その分、また学校生活に戻れて、一日一日を大切に過ごすことができたと思います。

この本を読んで、人から助けられても良いんだと思いました。迷惑をかけても、ただ申し訳なく思うのではなくて、自分のことを支えてくれることをありがたく思い、受け取ってもいい事に気づきました。知らない人でも、違う言葉を喋る人でも、助け合って社会が成り立っていくんだと思いました。

美紗都さんも、病気でとても苦しい思いをしていましたが、いつも周りから助けられ、愛されているのが、この話を通して上く分かりました。そんな関係を通して、病気に立ち向かおうとする力を得ることができるのです。また、周りの人も、自分が生かされていることや、支え合うことの大切さを知ることができるのだと感じました。